

# PHD LETTER

## 61

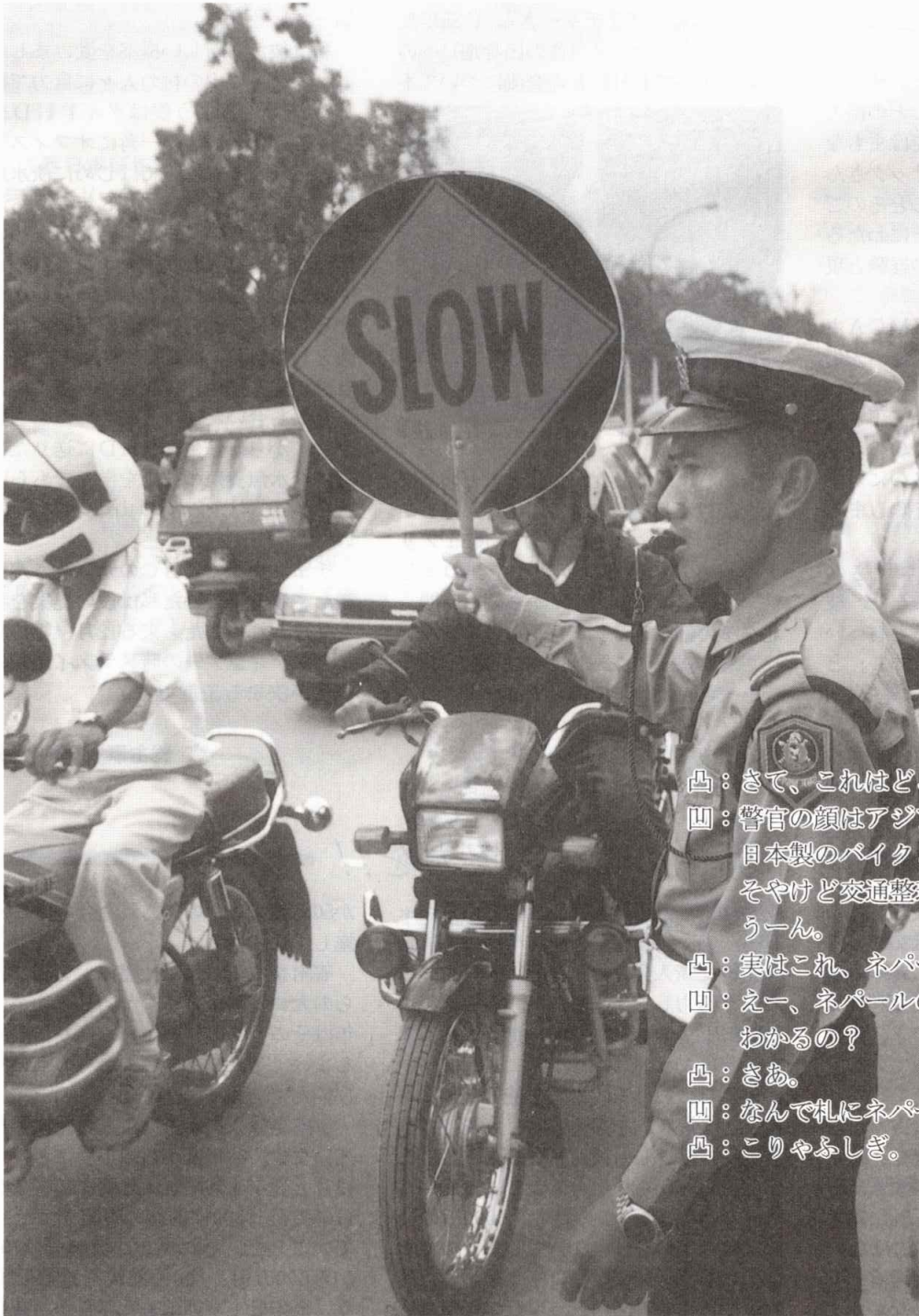
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1996・12

- スタディツアー報告..... 3・6 P
- Hotひと息～国際協力カルタ..... 7 P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄  
 編集人：草地 賢一  
 住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3  
 元町アーバンライフ202  
 TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867  
 定 価：100円



凸：さて、これはどこでしょう。  
 凹：警官の顔はアジア顔、走ってるのは日本製のバイクと車。そやけど交通整理の札は英語か、うーん。  
 凸：実はこれ、ネパールの首都カトマンズ。  
 凹：えー、ネパール人はみんな英語わかるの？  
 凸：さあ。  
 凹：なんで札にネパール語で書かへんのやろ。  
 凸：こりゃふしぎ。



# 村でがんばる帰国研修生たち ~北タイ

9月のはじめ阪神大震災地元NGO救援連絡会議の仕事で、中国雲南省麗江県にでかけ、そこからタイのチェンマイに飛び、帰国した研修生を訪ねました。

カレンバプテスト会議（以下KBC）の総主事サニーさん、パヤップ大学開発調査研究所（以下PRDI）のシン所長、短期研修生（'93年度）として同研究所から招いたチャラムサックさん、そして例年スタディツアーでお世話になるマクケーンリハビリテーションセンターの浅井重郎さんを訪問しました。サニーさんは今後のPHDとKBCとの協力関係について協議。PRDIではまもなくパパになる予定のチャラムサックさんの近況を聞きました。浅井さんとそのご家族とは食事を共にし10年以上にわたるチェンマイでの農業技術指導の経験と現状を聞きました。

定宿にしているチェンマイYMCAホテルで偶然パントーン・オングダム先生に会いました。PHDの東北タイ、カラシンの村との交流の端緒を開いて下さった開発経済学者でありタイNGOの理論的指導者です。タイ政府のNGOに対する姿勢や政策について意見交換しました。

その後ボッケオ村へ入りコマさん（'87年度研修生）を問安しました。彼は開口一番「先生、僕は今ずっと村へいますよ。そして頑張っていますよ」と言ってくれました。サチャコーン（真実のグループ）という村人のグループはかなり落ち着いてきており、最近ではキク科のマリーゴールドのような花（ブタの飼

料としても売ることができ、農薬、化学肥料を使わずに作付ができる換金作物）を栽培し安定した収入源になってきているようです。メンバーも固定しリーダーも育ってきているようで、来年には政府へCBO（Community Based Organization）の登録をする予定との事。

ついでムシキーを訪問し、「ムシキーがんばる布のグループ」と今後の交流について協議。プリチャーさん（'85年度研修生）のメラノイ（彼の出身地）への移動もあってPHDとの交流について不



「ムシキーがんばる布のグループ」の集まり

安もあるようでしたが、今までどおり交流を続ける旨確認できました。

一旦チェンマイに戻り今度はプリチャーさんの故郷メラノイを訪ねました。この町はチェンマイから約3時間。北タイの都市メサリアンからメホンソンへの国道沿いにあります。既にプリチャーさんは数年前に妻チャンタナさんをメラノイに帰し、コツコツと小さな雑貨の店を開き地盤を固めてきています。ランチャウカウ（山の村の人の店）とい

# 草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

う屋号は他の店のように自分の名前をつけないユニークなもの。いかにもプリチャーさんらしい命名です。今はすっかり山からメラノイの町に出てくる村人（主としてカレン人）の信用と信頼を得て着実に商売が進んでいます。既に国道沿いの新しい拠点に二つ目の店も建設が終わりそこは店だけでなく遠い山の人の臨時の宿泊や会合の場にしたいと張り切っています。

私は彼から新しい提案を受けました。「メラノイの山の村の人々に自力で村づくりができるよう僕はタイPHDを創る。この新しい店の一角にオフィスも作る。これを拠点にしてはじめて淡水魚養殖のプロジェクトを2、3年のうちにスタートさせたい。また手織り手染めの布販売などを拡大し女性のエンパワーもすすめたい。これは主としてチャンタナがやる。僕はこれらの働きが可能になる基盤として自分の店を発展させる。併せて自分の農業技術、体験をより多くの人々に分かち合いたい。そのためにもこのメラノイから研修生をPHDに送りたい。特に淡水魚養殖の技術を学んでもらい僕と一緒にメラノイの山の村に広めたい。」

チェンマイでKBCのサニーさんと協議し了承を得ていた私は彼の提案を喜んで受け入れました。来る12月、第13回タイスタディツアーの時メラノイ最初の研修生が決まる予定です。

総主事 草地 賢一

# 年末募金にぜひご協力を!!

PHD運動が始まり財団法人としての認可を得たとき、基本財産額は3000万円でした。当初の計画では、この基本財産を3億円まで積み上げれば運用金利3%で団体を維持していくことができ、会費および寄附によって事業を行っていく、と考えていました。

その後、15年間の間に多くの方々からご支援を得てきたおかげで、現在、基本財産は2億8000万円にまでなりました。ところが、現在の運用金利は1%に過ぎません。もっと有利な運用方法はないか、とは思うのですが安全性を考慮すると現在の低金利の状況ではなかなかオイシイ話はありません。

一方会費収入は会員制度導入2年目の85年度の920万円（会員数約3500人）をピークに減少し、89年度には600万円にまで落ち込みました。この状況に歯止め

をかけようと毎年6月、「会員増強キャンペーン」を実施し、一昨年には協賛企業を得て新入会員の紹介者に懸賞をつけるなど努力してきましたが、ここ数年は800万円台（会員数2000人前後）で横這いの状態です。

他科目における収入減を補うためにも何とか会費収入を高めようと会費の口座自動引き落としも検討しました。ところが銀行口座からの引き落としには1件につき手数料300円が必要で、5000円の会費では負担率6%となってしまうので断念しました。郵便貯金口座からの引き落としでは手数料60円と、現行の郵便振込と同額なので、これなら実現可能かと思ったのですが、2年前に郵便振替用紙にハンコを押して希望状況を調べた結果、郵便貯金口座からの会費引き落としを希望したのは全会員数の2.5%、わず

か50名程でしたのでこれも今のところ実施していません。

寄附金収入では奉仕団体、労組などからの大口寄附がいくつかありますが、今年はそのうちの一部が打ち切りになってしまい、それ以外の個人からのものも伸び悩んでいます。

寄附金収入の半分は年末募金に懸かっています。88年度から90年度にかけて、12月と翌年1月の2ヵ月間で1000万から1100万円、800件前後の寄附が寄せられていました。それがここ数年では700万から800万円、700件前後を推移しており、今年は上半期の苦戦ぶりからそれ以上の落ち込みになることも予想され、大いに危機感を感じています。

当会の直面する財政危機を乗り越えるためにみなさまのご理解、ご支援を、何卒よろしく願いいたします。

# 第10回インドネシア・スタディツアー報告

今年も夏はスマトラへのツアー。全員で11人が参加しました。日本での研修を終えた9人の研修生を訪ね、パダン市、パシルパルー村、アイルバンギス村に滞在しました。旅の目的は研修生の帰国後の活動を見ること、激励し助言をすること、村での生活体験をすることに重きがあります。参加者のレポートを連ねて報告します。

スマトラの漁業研修生の多くは静岡県西伊豆町の山本佐一郎さんから網の縄の縫いの向きについて指導を受けました。さ



アイルバンギスの村で縄の縫いについて説明するベディさん(左)。

らに山本さんの3度にわたる現地訪問もあったのですが、なかなか村で採用されるに至っていませんでした。そこを大学生浅野優子（京都市）が伝えます。

「アイルバンギスで市場に出かけた。そこで網の縄について議論があった。縄の縫り方向で漁の効率が良くなるらしい。そのことをベディさん（88年度）は学んで、村でやりたいと思うが、彼自身船を持っておらず、雇われの身であるため道具を選定する力はない。しかもその縄は遠くの町まで行かなければ手に入らないという。確かにその縄の良さを知らない船主してみれば、縄の交換は大きな賭けになる、変えて漁がパーになればという不安があるだろう。外の立場からは多少のリスクを負ってでも後々のことを考えるべきと言えるのだが、その日その日の漁獲高によって生活が左右される立場には、かなりの冒険なのであろう」と。

これに類する話は村の開発の現場では結構あります。日本で学んだことで、簡単に実現できることはそう多くありません。そこに研修生の苦労があり、工夫があります。今回はこの村の漁業協同組合長も話の中に入ってもらい、次の網の買換えの時に左縫りの縄をぜひ検討するよ

う頼んできました。

教員も参加しました。高校教師山口裕子（堺市）は「村で生徒と交流した。デキのいい子たちのクラスのような感じが、こちらでも学校に来ない子がいるらしい。学校の勉強が嫌いな子は来ないということだが、学校の勉強が嫌いでも村では漁師で生きていく道もあるし、日本のように学校に行かんと責められる子供とは違うな・・・」と訪ねた中学校での感想。

元看護婦の八坂幸子（佐賀市）は青く澄んだ海、純白の砂浜の無人島から泊まっている村への帰り、浜に近づくにつれ海の色が汚れていくのを見て、水俣病を思い浮かべました。

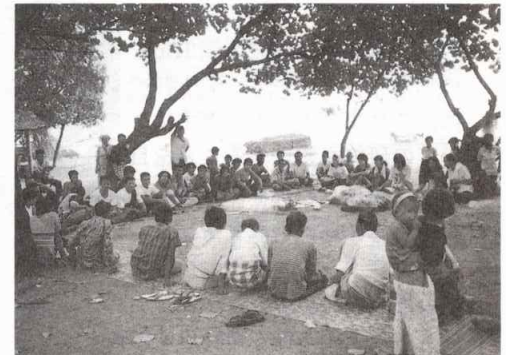
大学生寺井知子（愛知県小牧市）は92年度研修生ハスマヤニさんに会い、日本と村の生活は多くが違うし、一人の力は小さいけれど、彼女の考えや行動から何かを変えていこうという意志を感じ、そして「村の人に話してもわかってくれない、危急に貧し、困らないかぎり、変えない」という彼女の悩みながらもくじけ

ない姿に励まされています。もう一人の大学生中村恵里香（山口県下松市）は衛生環境の悪さや物と情報の少なさを感じつつも、貧しいとは思わず、村人の笑顔と温かさに感動。

村で泊まって、お腹が痛くなったのにその家にトイレがなくて困った小学6年の竹内英貴（加古川市）、井戸から水を汲むことに興が乗り、水浴びならぬ水かけをして楽しんだ同じく6年高田集揮（加古川市）。

それぞれに体験し感じ考える旅となったようです。研修生と村の皆さん、お世話になりました。

テリマカシ（ありがとう）。



パシルパルーの浜でツアー参加者と話し合う漁師の皆さん。

# アドボを作ってみませんか？

＜アドボの材料と作り方＞

材料（4～5人分）	
鶏肉（豚肉でも可）	600g
酢	60～40cc
醤油	40cc
ローリエ	2～3枚
粒胡椒	適宜
ニンニク	適宜

作り方

1. 全ての材料と一緒に（ニンニクはみじん切りにして）つけこむ。（約30分）
2. 鍋に入れて蓋をし、弱火で約30分炊く。  
\*炊く前にお肉をとりだして一度炒めておくともおいしく仕上がります。



当日の売り子の一員である専門学校の、辻村絵さんのイラストポスターも集客に一役



# 14期生

# 研 修 生 レ ポ ー ト

## 第6回日韓農民交流

ウピさん(インドネシア)

老人保健施設ケアセンター喜南/山田義治氏(島根・宍道町)~東出雲町保健福祉課/金本勉氏(島根・東出雲町)~佐倉真喜子氏、シオン保育所他(島根・西ノ島町)~特別養護老人ホームおかの花、春日町保健センター、春日町社会福祉協議会、加藤せつ子氏、春日町役場福祉課、三相園養護老人ホーム/臼井澄雄氏(兵庫・春日町)

今回はじめて保健研修生を受け入れてくださった春日町では、これまでの栄養、衛生についての研修を整理することを目的に「福祉」の視点から農村における住民健康管理を学びました。併せて、パッチワークの研修も取り入れました。

これまでの女性の研修生の帰国後の活動を見ていると、栄養、衛生分野の知識だけで村の女性に伝えようとしても、なかなか人は関心をもってくれないようです。その際に、洋裁、編み物等といった技術を持っていると、それが現金収入にもつながる可能性があることもあって人々の興味を引きやすい利点があります。

ウピさんと同じ村のラッドさん(12期)も、帰国してから洋裁技術を更に高めるために勉強を続けています。8月にスタディーツアーで訪ねたときのラッドさんとの話でも、ウピさんはパッチワークをしっかりと学んでおく方がよいとのことでした。



春日町の加藤さんよりパッチワークを学ぶウピさん。

ウピさん自身の意欲もあり、ご指導いただいた加藤さんも高く評価して下さいました。

また、春日町保健センターでの住民健診に参加した時のこと。80歳の女医さんと出

会い、治療よりも予防が何よりも大切なこと、その予防は日々の生活でできるとの話を聞くことができました。これは、PHDの提唱者岩村昇医師がアジアの村における病気の多くは、栄養、衛生上に気を配って



山口さん(中央)より洋裁を学ぶカインさん(右)/豊中市農産部さん宅で、農業技術センターで行いました。

いくことでかなりの部分防ぐことができると言っていたことと同じ話です。

カインさん(ビルマ)

太陽保育園/岸政次郎氏(兵庫・八鹿町)~国際交流の会とよなか、豊中保健所、豊中市原田老人デイサービスセンター、山口美恵子氏(大阪・豊中市)、比良保育園(滋賀・志賀町)/渡部光稀氏、松野久子氏、葛西美紗氏、栗栖弘昌氏~PHDひだ友の会、国際ソロプチミスト高山、高山市健康増進課、デイサービスセンター山王、大八保育園/杉本健三氏、石原正弘氏、中村征子氏、平野邦子氏、門義雄氏、山本千代子氏、山下茂氏(岐阜・高山市)、清美村住民福祉課(岐阜)

出足が遅れたために、研修の段階としては、保健を中心にいろいろなどところを見ながら、テーマを絞っていくところですが、ビルマで村の人のために作っていたという経験のある洋裁も取り入れて学んでいます。

豊中市での研修では、洋裁の先生にワイシャツのつくり方の指導を受けました。日本のやり方に比べ少々雑に済ませているところがあるようで、もう少し細かい点に

も注意をして丁寧にとの指導を受けています。これから、いろんなタイプのものを作っていくことで作り方、デザイン等の工夫を学んでいきたいです。

今後も、食品加工、乳幼児の栄養管理、洋裁等を取り混ぜながら、しばらくはゆっくりと研修をすすめていきます。

ビドゥルさん(ネパール)

兵庫県立中央農業技術センター(兵庫・加西市)~学校法人アジア学院(栃木・西那須野町)

農業研修をこれまで兵庫県内のいくつかの農家で行ってききましたが、理論的に整理する意味で土壌改良、有機肥料の効果等についての研修を兵庫県立中央



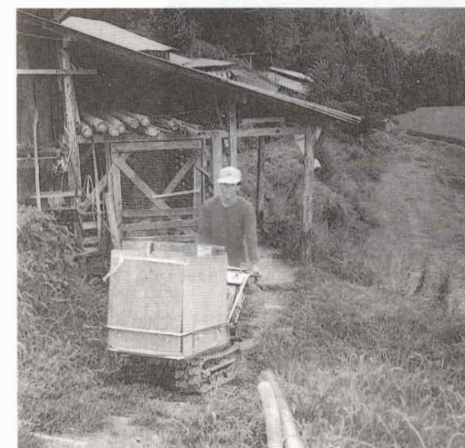
兵庫県立中央農業技術センター研究員の相野さん(左)から育苗施設の説明を聞くビドゥルさん(中央)

約8週間お世話になったアジア学院はアジア、太平洋、アフリカ各国から20~30名の青年を招きリーダーシップトレーニングを行うNGOです。ここでは、有機農業をベースに自給自足のシステムがとられ、その管理から食事、プログラム運営まで共同作業で進められています。ほとんどの人が、母国で生活改善活動の指導的な仕事をしており、その人たちとの交流、共同作業

等からグループで活動していく時に配慮すること、要求されるリーダーシップ等を学ぶことができました。

ビドゥルさんの場合、少し幅を広げて捉え、工夫しながら研修を進めています。

ミノさん(フィリピン)



鳥取県の笠間さん宅で鶏のエサづくりを学ぶミノさん。

8月後半からフィリピンの家族の手紙で、台風による影響でミノさんの家、田畑が被害を受けていると手紙がたびたび届くようになりました。何とか日本からの手紙での指示や草地総主事のフィリピン出張時にも彼から託されたお金を届けるなどで解決を図ってきました。

しかしながら家屋の破損、田畑の管理など予想以上に状況は悪く、送り出し団体SAFRUDIとも協議の上、異例の措置ではありますが、9月下旬より一時帰国させました。現在、事態の解決に取り組んでいます。途中入ってきた連絡によると、奥さんに心臓病があることがわかったりと厳しい状況です。

11月中旬には職員を派遣します。再来日、研修の再開ができることを願っています。

今年も韓国(忠清南道洪城郡)の洪城正農会から有機農業の生産者を迎え、日本の生産者、消費者との交流を中心に行いました。今回は初めて、女性だけの来日となりました。

<来日メンバー>

- 金 貞徳(キム ジュンドク 通訳・団長)
- 金 玉芬(キム オクブン 稲作・野菜・養豚)
- 朱 銀順(ジュ ウンスン 稲作・野菜)
- 李 秀蘭(イ スウラン 施設園芸、ホウレン草等)
- 李 存分(イ チェブン 養豚・もやし栽培)

淡路島モンキーセンター(兵庫・洲本市)~山口勝弘氏(兵庫・南淡町)~色作郎氏(兵庫・市島町)~河南義一氏ふさえ氏(兵庫・丹南町)~中野宗嗣氏(兵庫・春日町)~ふえろう村塾(兵庫・小野市)~神戸大学農学部教授保田茂氏(神戸市)~食品公害を追放し安全な食べ物を求める会/松下量子氏(神戸市)~兵庫県定住外国人生活復興センター/金宣吉氏(神戸市)~グループゆうき・らいふ/金子まち子氏



淡路島モンキーセンターの経原利和さんと、食品公害について学びました。

(兵庫・宝塚市)~「食と農を考える交流会」/京都大学農学部名誉教授飯沼二郎氏・大阪府有機農業研究会/尾崎零氏・神

シャリフ・アリさん来日

インドネシア、スマトラで研修生の推薦、送り出し、フォローアップの窓口となっていたシャリフ・アリさん(大学教授)が西スマトラ州の議員団を引率し来日。大分県で一村一品運動を視察、神戸にも立ち寄られ震災後にできた仮設の作業所などを見学されました。

戸学生青年センター・日本基督教団兵庫教区社会部委員会(神戸市)



最終日に韓国の農業、有機農業の実情を報告しました。右は報告者の金玉芬さん。左は通訳の安柄烈(アン ビョリョル)さん。

有機農業の生産者を訪ねた後、消費者グループの食品公害を追放し安全な食べ物を求める会(以下求める会)の松下量子さんから話をうかがいました。

求める会は生産者から直接有機農産物を購入するグループです。季節により野菜の量が違ったり、働く女性が増え、共同購入の継続が難しいなどたくさん問題があります。しかし、援農の体験からも生産者の苦労はよくわかるので、生産者と顔の見える関係を大切にして、この運動を続けたいというところでは、拍手がわいていました。

また、松下さんはとても流暢な韓国語で話して下さいました。これにも大感激でした。

韓国は有機農産物も市場を通して販売されることが多いようです。メンバーは、帰国後、健康や環境問題を理解し提携できる消費者を探すため、近くの団地を訪ねて話し合うと意欲を見せていました。



神戸市長田区の仮設作業所を見学する一行。左から3人目がアリさん。/南朝栄公園にて



# 第9回ネパール・スタディツアー報告

83~84年に滞在した2期生ラダさんが帰国し、ポカラで地域の人々を対象に編み物を指導し、その生徒さんたちによる手編みのセーターの製作販売による収入確保や識字を中心とした活動をすすめています。

このグループの活動に対し、日本から編み物の先生を派遣すること、この先生を窓口にして毎年セーターを日本に仕入れ販売に協力することといった支援を続けてきました。

今回はこのグループの活動強化をねらってラダさんに続く研修生をグループから迎えることとし、その人選のためポカラをスタディツアーのメンバーとともに訪れました。

事前の連絡により5人の女性の候補者が挙がっていました。朝の8時半から選考会を開始。まずはラダさん、青年海外協力隊でポカラにいる山田真綾さんの通訳をばさんでPHDの考え、研修の内容を説明しました。

ところが4人はメモをとっているのに1人ただ聞いているだけの人が出て、ヤル気がないのかと思ってラダさんに尋ねると、その人は字が読み書きできない、でも編み物に取り組む態度、熱心さは他の人たちに劣るものではないからこの会に加わることを認めたとのこと。彼女のことを気にしつつ、続いてそれぞれの人物を知るための質問表記入に移りました。先の彼女はむろん書きません。ラダさんが口頭でやりとりし、それを聞き書きする形となりました。



ラダさんのグループの人たちにかばんづくりを指導する若佐さん、右奥にサビトリさん。

読むことができれば、文字からの情報が得られません。もし研修生に選ばれたとしても、出入国の手続など一人で旅して日本に来ることができません。勉強するにも、自分の言葉での記録ができないし、顔を合わせて話すことでしかやりとりできません。時間的にも、空間的にもとても制限され、コミュニケーション

が極端に限られてしまうわけです。

彼女はラダさんから教わり、最近自分の名前だけは書けるようになったそうです。字が書けないとはどういうことなのか、識字の大切さを彼女の存在から強く感じました。

質問表をもとに個別の面接を行い、夕方に全員終了。今回のツアーに参加したラダさんの編み物指導者の一人、姫路の岩佐康子さんを交えた協議の結果、サビトリ・シュレスタさん(独身・28歳)を97年の研修生としました。

ポカラの後にはパラト・ビスタさん(82年)、ビショジョティさん(95年)、そして現在日本で研修中のビドゥル・ビスタさんの地域マンナンマハデブスタンを訪ねました。ここではパラトさんが作ったサマ・セウ・サムハ(SSS)というグループの活動を見学し、山の村に一泊させてもらいました。

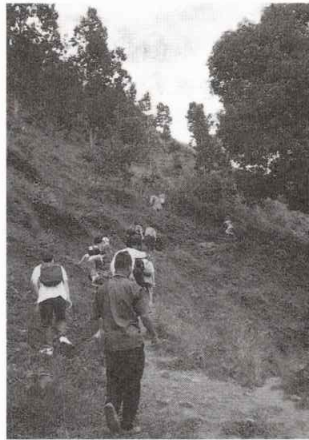
パラトさんにポカラでの人選について報告し意見を求めたところ、いろいろと問題のあるネパールの状況の中で優先的に採り上げるべきは女性の置かれた立場であり、今回女性を研修生として選んだことは良いことだと思うと話してくれました。

それはネパールの家庭における性差による役割、立場に大きな違いがあり、女性に負担が多いことがその理由のひとつです。例えば妻は家事一水汲み、炊事、洗濯、妊娠・出産・育児に加え、外での仕事一農作業、賃金労働があり、かたや夫は稼ぎにつながる外での仕事で、家に戻れば何もなくていいようにみえることもあります。これからすれば家事もこなして稼ぎもできる女性のほうが、家事をしない/できない男性より、ずっと実は自立しているように思えます。女性の自立という掛け声より、逆のことが必要では、と感じてしまいました。

男の子は大事に育てられ、学校に行くこともできるが、女の子はそれに較べると扱いに差があり、学校に行けないことも多い——女性の識字率が低いのはそこにも原因があるのでしょう。パラトさんとの話をするうちに女性の研修生を招くことの意味を改めて思いました。

今回の旅は12人で出かけました。顔ぶれは主婦、教員、会社員、学生、商店手伝い、いわゆるフリーター、無職と

様々。帰国後、同窓会も行われ、ネパールの人々との出会いから気づいたり、学んだりしたことを報告文にまとめつつあります。その中の一人看護婦を目指す真鍋由希(明石市)さんは、町や村での保健衛生の状況について「医療施設が少なく、簡単に医療を受けられないここでは、食糧、給水、環境衛生の普及が大切



SSSの事務所から山を歩いてマグルの人たちの村へ

なことだろう」とレポートに記しています。

山並みを眺めることも皆さんの楽しみのひとつでしたが、今年は雨期明けが遅くて雨が毎日降り、見る事ができませんでした。しかしラダさん、パラトさん、ビショさん以外にもアマティアさん(82年)、アディカリさん(84年)、ガウチャンさん(85年)たち元気な帰国研修生に会うことができました。

(小松 みち)

## 第6期林業体験合宿「枝打」

8月30日~9月1日  
兵庫県多紀郡丹南町大山

枝打ちや間伐などの林業作業を行うことを通じて日本の林業の現状について学ぶとともに、世界的規模で進む森林破壊について考えよう、という夏のプログラム「枝打」が、第14期生ビドゥルさん、ミノさんも含む計18名の参加者を得て実施されました。

かつては建築の足場として用いられていた間伐材も今では金属製のパイプに取って替わられ、わたしたちが切り倒した樹齢20年近くの木も森の中で朽ち果てるままになっています。参加者の幾人かは記念にと輪切りにしたものを持って帰りましたが、何らかの有効利用方法を考えていかなければならない、と痛感しました。

# PHD NEWS

## ＜会費・ご寄附寄託状況＞

1996年	8月	65件	1,722,211円
	9月	122件	6,757,029円
	10月	93件	11,801,482円
		280件	20,280,722円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

## ＜ご支援に感謝申し上げます＞

10月18日、東京で自動車総連より7年目となる福祉カンパをいただきました。今年は8月にも別途カンパを頂戴しています。あわせてお礼申し上げます。

## ＜西日本研修旅行のご案内＞

社会学習とリーダーシップトレーニングを兼ねた研修旅行を下記の予定で行います。研修生

との交流、同行ご希望の方、お問い合わせ下さい。

日程：97年1月中旬~2月上旬  
予定コース：水俣~筑豊~北九州~広島~島根~鳥取  
☆研修生4名と職員が車でまわります。

## ＜新入会員ご報告＞

59号(6月号)の会報で、またチラシを同封してお願いしていた会費納入、会員拡大キャンペーンに対して、4月~9月の半年で、84名の新しい方が、ご入会下さいました。ありがとうございます。ご紹介下さった会員のみなさんにも感謝です。会員のみなさんお一人お一人からの紹介は、とても大切なものです。どうぞこれからも引き続き、PHDの活動をご紹介下さい。

終身維持会員：4名  
PHD会員：64名  
友の会会員：16名

会報、パンフレット等の資料がご入用の方はお知らせ下さい。

# ホッと Hotひと息

直す旬などなど・・・また、

## チリを使えば辛くなる

というようなホッとさせる句も織り混ぜ、大人も子供も一緒に楽しみながら学んでいきたいと思えます。メンバーは学生、教員、歯科医等多彩・・・ではありますが、無い知恵をしぼりきって少し停滞しています。そこで、新しいメンバーも加えて、更にパワーアップして活動再開したいと思っていますので、お近くの方は直接事務所で、遠方の方はTELやFAXでご参加下さい。



## 飽食は万病のもと

エビでタイを知る  
飢えには故(ゆえ)がある

のようなアジアの事情を伝える句

森破壊して惨禍あり  
巨富の利

のような先進国からの影響を伝える句

雨から出たサビ(酸性雨)

のような環境ネタ

飽食は万病のもと  
敵は煩惱にあり  
田畑の持ち腐れ

というように私たち日本の暮らしを問い

## ＜ホストファミリー募集＞

15期生4名(男3女1)の滞在家庭を募集します。詳しくはお問い合わせ下さい。

期間：来日(97年3月末)から6週間は毎日、以降月平均7日程度で98年3月末まで。

場所：神戸三宮まで1時間程度で通える範囲。

経費：当会規定の食費・滞在費をお支払いします。

## ＜出版物のご案内＞

阪神・淡路大震災の救援活動で知り合った大阪女子大学の藤田正さんが「私論 被災者の心理」(ナカニシヤ出版：2500円)を出版。

印税の一部がPHD協会への寄附になります。当協会にも在庫があります。

## 〇月×日のPHD協会

職員 吉岡 韓国からの5人の年上女性農業研修に同行。皆さんから感謝の意を抱擁で表したいとの嬉しい申し出に一人5分で、と切り返す。なごやか。

職員 藤野 福岡県庄内町から招かれ町職員研修、国際理解講座など3日間7コマでお話。ある会合は衆院選挙立候補者の演説の後となり、やりづらい。

職員 小松 ネパールに出張。暗い夜道を歩き研修生の家を訪ねる。途中ドブにはまり泥だらけ。案内の少年にお湯で足を流してもらい気をとり直す。

職員 渡辺 第一子ご誕生。6月に帰国した研修生ビショさんの予言通り女の子。ネパールの男女識別法はアテになる。

職員 草地 広島で行われた行事「アジア交流広場」のシンポジウムで料理記者歴40年の岸朝子さんと同席、NGO職員歴12年で対抗。

職員 谷 合宿をはじめとする野外行事の万に備え、日赤救急法一般講習を受ける。三角巾巻はトップの成績、人形相手の人工呼吸にガッカリとか。

ワンワールド・フェスティバルの会場に県立尼崎高校、元町の事務所には向陽台高校の生徒さんたち大挙してPHDの説明をききに來られる。また松原高校(松原市)、愛農学園農業高校(三重・青山町)、赤塚山高校(神戸市)には研修生、職員訪問とこのシーズン、ちょいと高校ラッシュ。次代の日本は明るい?

(誕生月順)





## 編 集 後 記

私はこの4月に香川県から「国際協力とは何ぞや」と鼻息を荒立てて、はるばる神戸にやって来たものです。そして気づけばPHDに通っていました。土曜日になると足が勝手にPHDに向かい、研修生たちと笑い転げているうちにいつの間にもやら一日が終わっているという感じ

でした。（日本語復習のお手伝い）特にウピさんと私は大の仲良しです。ウピさんは早口でしゃべり、よく笑い、街をブラブラするのが好きで、おいしいものにはめっぽう弱いと私はいらんでいます。

日本語の勉強が終わり午後からが私たちのデビューでした。元町商店街を買いもしないのに「あーでもない、こーでもない」と物色し、においに誘われて南京街に寄り一品ずつ買い、交換などしながら一度に2度おいしくいただく。はたまたハーバーランドに行っては買いもしな

いのにまた「あーでもない、こーでもない」と物色し、お決まりのようにアイスクリーム屋へ寄り、二人ともダブルにして一度に4度おいしいということになる。こんな私たちはオチャメでしょ!?

ウピさんと私のかかわりはお互いを、そしてお互いの国を知り、自分の国を知る国際交流の第一歩ではないでしょうか。みなさんのかかわりはどんなものですか。いろいろな意見を待っています。

古本 妃留美

編集メンバー：石崎 好美、篠原 登子、  
古本 妃留美、山口 有香

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。